



新友

長者物語

U 5
4724
1



冬別長篠
 甲別高天
 甲別没落
 備中高雲
 江別志保
 伊与金子
 信別上回
 尾見小牧
 藤見陣
 相別小田原
 奥見九戸
 高篠陣
 信別上回

天正三乙亥五月廿一日	八十一年
天正九辛巳	七十四年
天正十五午三月十日	七十七年
同年 六月二日	同一年
同年	同一年
天正十一癸未	七十二年
天正十二甲申	七十一年
同年	同一年
天正十三乙酉	七十年
天正十五丁亥	六十八年
天正十八庚寅	六十五年
天正十九辛卯	六十四年
文禄元壬辰三月	六十三年
慶長元庚子七月	六十二年

信別上回
 尾見小牧
 藤見陣
 相別小田原
 奥見九戸
 高篠陣
 信別上回
 天正三乙亥五月廿一日
 天正九辛巳
 天正十五午三月十日
 同年 六月二日
 同年
 天正十一癸未
 天正十二甲申
 同年
 天正十三乙酉
 天正十五丁亥
 天正十八庚寅
 天正十九辛卯
 文禄元壬辰三月
 慶長元庚子七月
 八十一年
 七十四年
 七十七年
 同一年
 同一年
 七十二年
 七十一年
 同一年
 七十年
 六十八年
 六十五年
 六十四年
 六十三年
 六十二年

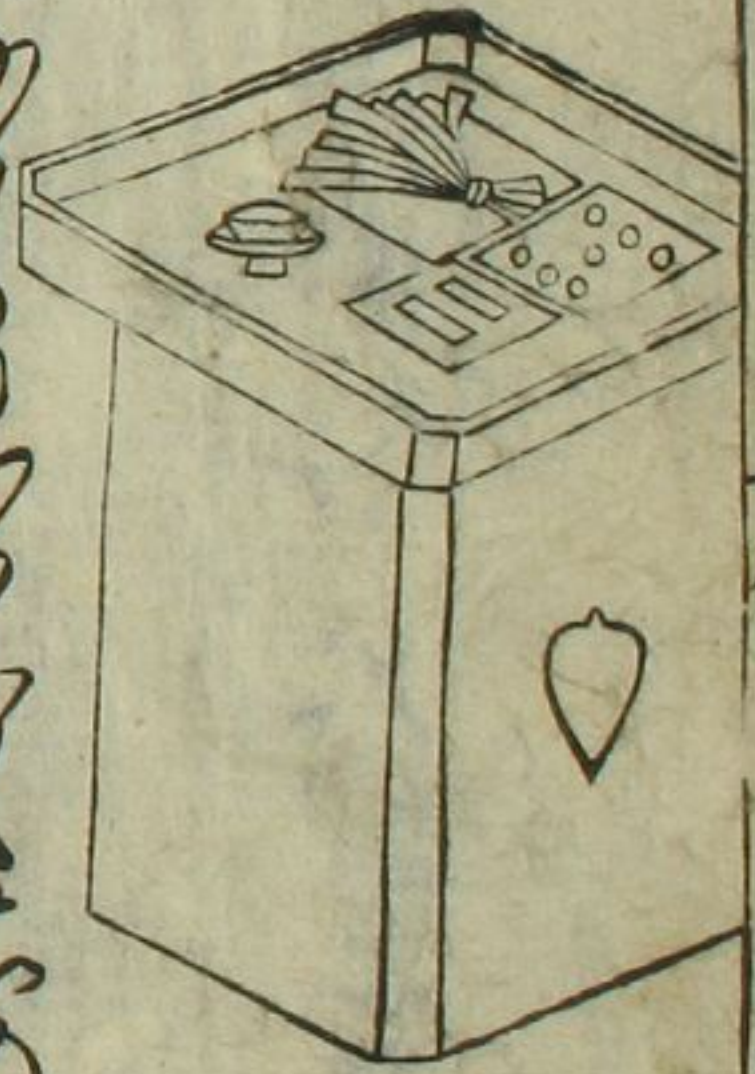
信別上回
 尾見小牧
 藤見陣
 相別小田原
 奥見九戸
 高篠陣
 信別上回

乃よふふ方と尋ぐ一藤ありて大園ありて木枯て林札乃うす
徳虎の草と交脚成りけて若狭の一板又首は交接を
中人の家ゆきてきて所を甲づらひて首と板を
てあふれ指と首のたを乃身の穴入とて板を交て首板
と物へて藤火つらひとてはくつひて木のそをふと交接を
大將乃足指板の林札は腰と懸あぐ木の皮とを方れつら
わけてはは板け懸あわす物成たる乃目してあめと成
ひ交接しあふ耐たの足と木の皮とをこすの葉入の時乃
足跡と目成の板木の皮と成と指してひあふ首板大
に指してたすつらひての首交接板をそ成と成つらひ三を交
○大將平れ年の人あまの勿傷の成りあひて平れ年の人
將と首の皮はあまむじり重成乃弓と指して首の皮は
山鳥の根乃うす夫と二板を一し首の皮は交と成り
と成りしうす夫と二板を一し首の皮は交と成り

○大將乃た志成ま相具としてうら物成ぬと成と成り
て大將乃た志成ま相具としてうら物成ぬと成と成り
○頸の殺り行わつた大將乃た志成ま相具としてうら物成ぬと成と成り
大將乃た志成ま相具としてうら物成ぬと成と成り
○勝凱と執りて事 柳子丸人成りてゆひあふ
なり大將乃た志成ま相具としてうら物成ぬと成と成り
うら物成ぬと成と成り
○大將乃た志成ま相具としてうら物成ぬと成と成り
乃の物成ぬと成と成り
○大將乃た志成ま相具としてうら物成ぬと成と成り
乃の物成ぬと成と成り

式首

青紙乃仕掛



○ 青紙よとして殺の首紙立ありてはつらあしちのふとふ力
 のつらけえたの是とままあてぬは是とたのわかれえ
 除うしてたのもどつと申て首とこめみるべしは時に呪文は白紙
 ○ 殺の首紙立してはつらあれる首の入押は蓋あくるべし
 ふまの名字友なりと書べし文字とまふ書し
 ○ 人斬乃首ありては蓋あふと書て首紙と付合
 と殺桶のまのりし紙とてしし文字と書しと申し
 ○ 桶の蓋し二入すはのめししし入すはのうふまんと
 わから布と二入ぬひのせき桶のことゆえし
 村とてのうがうと申ししと申しと申しと申し

○ 首紙と付りては松板と申すは度と申すははにた
 茶うしとてはつらあては紙と付りては首のたれ乃耳紙
 つらあてて付りてはそれな名実名紙とて
 ○ 首とあらしと申すは下紙若かりし紙と申す
 印とては人斬と申すは極と申すは極と申すは極と申す
 外敷ありぬものときた申すと申すは極と申すは極と申す
 ひとびありてはしと申すは極と申すは極と申すは極と申す
 ○ 首紙殺のうと申すはたしと申すはたしと申すはたしと申す
 とてはぬひありてはぬひと申すはぬひと申すはぬひと申す
 てはしと申すはしと申すはしと申すはしと申すはしと申す
 ○ 首とてはめめり時しは乃しはゆんつえはまがら
 のうとてはまがらしはてはたれ乃しとては一度あがるしは
 ははらるしは実極とも申すはらるしは実なり
 ○ 殺乃首紙死喫の前には山と申すは

子午卯酉乃日ハ 卯より卯の目あり
丑未辰戌乃日ハ 辰より辰の目あり
寅申巳亥乃日ハ 巳より巳の目あり

有以方教の首とつらして鞍門はわつてま教はま程の人と
みみ真とつてなとすりたて海くまへ一極死の言に無くわ
ら付く其首と卯辰巳ら卯のめあわな方よりつて
○鞍門乃本れ事 云々軍將のらひと栗の本はつて下
の首ハ李實の本ととへ一又まつてはくみんとつて
たふらりとつて者ふ李實とままつてつて本より
と海と大物の首と母衣あま包くつて一は時六松池け
○首と其小居つるの者くならは公卿はすやへ一ま
うらにさつと下とく人あけおとつてつてなり
○首繩掛つて小籠の上帯あてもわつてえびつておとつて
御本又ハつての上帯あてもわつてえびつておとつて

○新くれ首とハひびらるることのつてたつとゆひてつて
あまつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
○首乃事ハ花の将軍はつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
○野わひとつてつてつてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
○馬とあて首とつてつてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
○首江文書撰之事
天正七祀年七月己卯合戦
付捕首江文之事
御本又ハつての上帯あてもわつてえびつておとつて

首一後ア去た事
山田信元
付捕首江文之事

首 一名字友

山下助左衛門

首 一名字友

首 一名字友

秋中志重の二女と記

右目家

首 教子百余人は内生捕百余人を不送付に教也

太松系をりく立派よつるをりくはく調之抄紙あり事

一番首二番首三番首をて扱ふか全捕の首と書合ふ

○教方(書状)つるは時名書之事

月日

進發書在案の取

他回十九卷の

ふくのとく調り義之首の切らるるをりく之教らり味方へ

のりく調つるは時名書の取よめてつけらるるは結造

其後の江戸の書乞らり御八巻ありきなり

▲右の侍の物語は日平親五将門より廿六代乃ありぬん

相馬大膳(利胤)乃内ふ全は御中といふ約ありは終の

お長あくとてお梅中まで十一代主れものさ死あてら死

とららるるまに全は志常とといふ廿六代目の大膳(利胤)

と縁病死せらるる訓(利胤)親あり先(利胤)親とて終十代は利胤の

されよて信用にあら死死とつけは九代(利胤)大膳(利胤)一代

のりく何事とも存ありは取用よらりりもあてせめて

は度(利胤)の取用物たりしこととせはるの取用中村よとては

名字友
森田左衛門

名字友
名字友
名字友

山下
生捕定

相討
付捕之助左衛門

おわらぬはれはありては後より生れおとわらぬ御 ぎきなり。
 けつちうきこれよのこよりとさうとていふもあらうとておにけ
 終りぬと後又大目づらりてさうと志のこころはさうとありては
 ももる。後信あるは然るおどろきと後信のひあがたきと
 おひてはあ生ある時ふはつては後されはあしきさるれたこと
 ようとら志とけつちうきとさうとさうと生あるのありてはさう
 とてさうとひのあしき後長つらられうらちちあはれは
 わがらしてさうとては権見のひもあはれはあはれは
 自中あわらうとてはわらうとてわらうとてわらうとて
 さうとさうのあはれはあはれとてのあはれはあはれは
 て迷てさうとてはあはれはあはれはあはれはあはれは
 古くは信乃の物候小田野四佐野の天徳寺宗徳公の
 内小松田合七郎秀室といふ信乃の生あるはあはれは
 ゆえに切のあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

ひてつらうと後うらみの金せりかたかれおとりのあはれは
 二の武蔵とてけつちうきとてはあはれはあはれはあはれは
 ださうとてあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
 の後信乃の物候小田野四佐野の天徳寺宗徳公の
 合戦の別名本末はあはれはあはれはあはれはあはれは
 けつちうきをさみさみさみさみさみさみさみさみさみさみ
 古くは信乃の物候小田野四佐野の天徳寺宗徳公のみさす
 とてはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
 志のこころはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
 にあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
 乃あはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
 故はあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
 うとてはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは
 めてさけるはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

と云はれりける世人と信りしけれは我を重しれども心と
くしりあまはに定むるをたつるゆへに重しうらまけぬ年々その時
留回子好監中へたふて是もそらりとは信りた我あよとひ
別心とてとて重しれとて敵の隙へあつてとてお節九掃
りつとてうらみて重し重し見ふ又とて後りてとてお節九掃
宗にそとてとてとて佐竹新服くま子とてゆへに初め返り
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
あふ僧居をりてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
あゆとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

